

〈その他（書評）〉

翻訳をめぐる近年の出版と山本史郎著『翻訳論の冒険』

吉城寺 尚 子

【要旨】

山本史郎著『翻訳論の冒険』は翻訳論の歴史と基礎概念、および著者自身の考える翻訳論を、翻訳・翻訳論の専門家でない読者にも向けて、豊富な実例を用いて丁寧かつ大胆に、個性的に論じている。言語テキストから映像へ、異なるメディア間の翻訳へと広がる著者の翻訳論の可能性に期待する。

キーワード：翻訳、翻訳論、映像への翻訳、メディア間の翻訳

1. 翻訳をめぐる近年の出版

2022年6月、翻訳家・文芸評論家の鴻巣友季子氏は『朝日新聞』の「文芸時評」欄に次のように書いた。「この10年、英米における翻訳への関心の高まりを感じてきた。……日本でも翻訳に関する重要書が次々と刊行されている。ローレンス・ヴェヌティ『翻訳のスクandal』の待望の邦訳（秋草俊一郎／柳田麻里訳、フィルムアート社）¹もその一つだ。」鴻巣氏は以下にヴェヌティの打ち出した「同化・異化翻訳」「翻訳者の不可視化」概念を紹介し、続けて同年のブッカー賞受賞作を論じている²。

本稿筆者は翻訳論の何たるかも知らぬまま、いくつかの文芸ではない翻訳を手がけたことがある。また翻訳小説を愛読しているが、たまに原著と比べて考えることがある。映画『9人の翻訳家たち 囚われたベストセラー』（2020年）を見て「翻訳者の不可視化」など翻訳をめぐるさまざまなことに興味を持っていたこともあり³、ヴェヌティの『翻訳のスクandal』（2022年）を通読した。本稿筆者にとってはかなり難解な本だったが、その理由の一つは「翻訳についての議論を翻訳で読む」ことの複雑さにあったのではと思う。

近年の出版で、日本における翻訳論・翻訳研究の歴史と概要について知るてがかりになったのは、佐藤＝ロスベアグ・ナナ氏の『学問としての翻訳』（2020年）⁴である。また同氏編著の『翻訳と文学』（2021年）⁵は、日本における文学の翻訳研究の現在を知ることができる論集となっている。

佐藤＝ロスベアグ氏の『学問としての翻訳』は、雑誌『季刊翻訳』『翻訳の世界』の消長を軸に、日本における翻訳研究の展開を考察した著作で、欧州で発祥した「トランスレーショ

ン・スタディーズ」との関係や相違に言及している。著者によれば、欧州と英国で確立・発展している「トランスレーション・スタディーズ」は、日本では、学問として制度化されたと見なせるものの、欧州のように発展する条件はまだ整ってはいないという⁶。そこで「トランスレーション・スタディーズ」というカタカナ表記と「翻訳」「研究」という漢字熟語が交錯し、浅学の本稿筆者は含意の正確な理解のためにしばしば立ちすくむこととなった。

そして2023年には山本史郎氏の『翻訳論の冒険』が出版された⁷。本書「あとがき」には、本稿筆者がヴェヌティの訳書や佐藤＝ロスベアグ氏の著書の用語に呻吟した理由の一端が示されていたように思う⁸。もちろん理由は両書の翻訳や訳語にあるのではなく、本稿筆者の浅学によるものである。

2. 『翻訳論の冒険』

本書『翻訳論の冒険』の著者は山本史郎氏、A5判368+viiiページのボリュームで東京大学出版会から2023年に発行された。著者は巻末の著者紹介によると、本書刊行時点で東京大学名誉教授、順天堂大学特任教授を務めている。

本書は「Ⅰ 翻訳になぜ理論が必要か」「Ⅱ 翻訳の実例を見る」の二部で構成され、それぞれが12章の記述から成っている。大きくは第Ⅰ部が理論の部、第Ⅱ部が実例の部と見ることができ、第Ⅰ部にも豊富な実例が含まれ、第Ⅱ部でも豊富な理論が展開される。

第Ⅰ部では、20世紀の翻訳議論の流れと概要として、ナイダ、トゥーリー、ルフェーブル、ヴェヌティほかの研究から、等価[equivalence]論（形式的等価、動的等価）、古典的意味論、テキスト言語学、スコパス理論（「機能」の等価）、理論翻訳研究（理論研究と記述研究）、応用翻訳研究、同化と異化（domestication, foreignization）などが簡明に紹介される。そしてヤーコブソンによるtranslationの意味を広げる提案から、「私の翻訳論でも、日本語の「翻訳」の本来の意味にはとらわれず、同じ種類の精神の営みと考えられるものなら「翻訳」と呼ぶことにする」（p.26）と規定する。

次いで日本の初期の「翻訳」と「翻訳論」（第04、05章）、逐語訳と「意味」について、「意味空間」の提唱（第06-08章）、関連性理論（第09章）の記述が連なるが、ここまでは次章から展開される著者「独自の理論提示の準備」（p.125）である。著者の考える「翻訳とは、すなわち、原テキストと類似の暗意を生むような明意のテキストを異なる言語によって実現することである」（p.133、太字強調は著者による）という。

第Ⅱ部「翻訳の実例を見る」では、日本語・英語を中心とした外国語間の文学テキスト翻訳を中心に実例が取り上げられる。著者自身が翻訳した『ホビット』『赤毛のアン』をはじめ、翻訳者は明治期から現代まで、対象は『源氏物語』から現代小説まで広範にわたる。視点・声・心理劇の翻訳（第03章）、仕掛けの翻訳（第05-06章）、映像への翻訳（第11章）、メディア間への翻訳（第12章）という視点と実例により、著者の翻訳論の姿が具体的に示される。

3. 文学テキストから映像へ

本書は、翻訳とは何か、翻訳論では何がどのように問題とされる（されてきた）のか、という本稿筆者が持っていた素朴な疑問に明快に答え、著者の考える翻訳と翻訳論を、本稿筆者のような門外漢にも理解できるよう丁寧に教示してくれる。

本書の構成や文体にはいわゆる学術研究書にはない親しみやすい部分があるが、決して内容のレベルを落としているわけではない。本書から目を開かれたことは多々あるが、中でも「私が大嫌いなことばがある。「詩は訳せない」という常套句である」(p.174)で始まる一節には衝撃を受けた。詩は訳せないと思い込んでいたからである。著者は本書の冒頭に「詩、散文、演劇などのジャンルの違いはどう考えるべきか」という命題を掲げ、これについては「論述にうまく流し込むことができなかったの、理論を説明した第Ⅰ部の最終章でエッセイ風の文章によって考えを記した」(p.i)。このように闊達な叙述形式や文体も、本書の魅力のひとつである。

本稿筆者が最も興味を抱いたのは、第Ⅱ部第11章「映像に翻訳する—『ホビット』『チョコレート工場の秘密』『ふしぎの国のアリス』」、第12章「メディア間の翻訳を考える—『ジェイン・エア』から映画、児童書、語学教科書へ」である。

美術史では、写本や版本の挿絵を文学テキストの図像化とみて検討したり、神話・宗教・文学主題の絵画や彫刻について、かたちと意味の継承と変化を、様式史や図像学・イコノロジーその他の視点から検討する方法がある。本稿筆者は文学テキストの映画化作品についても同様に検討できないだろうかと考えてきた。また、本稿筆者は「翻訳」を文学テキスト間のものであると限定的に認識していたが、かねて興味を持っていた小説などの映画化やリメイクを、広い意味での翻訳として考えてみたかったので、上記の2章を非常に興味深く読んだ。

第11章では、文学テキストから映像への翻訳(adaptation)が、文学テキストから他言語の文学テキストへの翻訳と同様に「暗意の転換」という視点から分析できることを、『ホビット』『チョコレート工場の秘密』『ふしぎの国のアリス』のテキストと日本語訳、および映画化の例から示している。

第12章では、シャーロット・ブロンテの*Jane Eyre* (『ジェイン・エア』)と4種の映像化、児童書、オペラ台本、リトールド版への翻訳をとりあげる。これらの明意の変換には、必ずしも類似の暗意を生むためとは言い難い場合がある。原作に忠実なadaptationから別の作品と言えそうなものまでであるなかで、どこまでを翻訳と呼ぶべきかは明示されない。最終章(本章)の末尾は「翻訳論の課題」として「そのような変容は、なぜ、どのような条件のもとで、いかなるメカニズムで起きるのだろうか?それを考察するのが翻訳論の使命なのである」(p.341)と結ばれる。

文学テキスト間以外の翻訳についての著者の見解は、本書第Ⅰ部にも記されている。翻訳の定義を述べた第3章では、英語のtranslationには日本語の「翻案」までもが含まれること、文

学テキストの他の媒体への移植にはadaptationが用いられるが、日本語では「映画化」「ドラマ化」などと表現し、総称は存在しないことが指摘される (p.26)。

日本の「逐語訳」について述べた第6章では、著者は新たな翻訳理論の枠組みへ向けて「「意味の変換」を一般化するなら、その範囲を文字媒体に限定することには根拠がなく、絵画、映像など他のメディアの「テキスト」への変換が射程に入ってくる」(p.71)とする。

関連性理論について述べた第9章では、「文字媒体による表示と、その他の媒体による表示は、究極的には同じ種類の精神活動として、1つの観点から眺めることができるはずである。味や匂いまで含めた一般〔翻訳〕理論はるか遠い目標であるにしても、身近なところで、例えば文字媒体への変換と映像媒体への変換を、同じ「翻訳」という観点から統一的に見ることは可能ではなかろうか。……文学作品の映画への「翻訳」、すなわちadaptationについての論文や著書はすでに出始めている」(p.136)と述べる。

4. 針の穴にラクダを通す⁹

著者の「原テキストと類似の暗意を生むような明意のテキストを実現する」という翻訳の定義に全く異議はないが、具体例の細部に多少違う感覚を持った部分はある。

第Ⅱ部第6章は「暗意を同じくするために、原テキストの明意を大きく変えなければならない」(p.235)仕掛け翻訳の例を検討している。例えば『ホビット』の一節で、“....Also eagles aren't forks!” / “O no! Not a bit like storks—forks, I mean,”という部分の翻訳として「それにワシはハシじゃないさ」「そうそう、そのとおり、カモノハシ——いやいや、ハシとは似ても似つきませんよね」という著者訳を紹介している。フォークをストーク(コウノトリ)と言い間違え、ワシを怒らせる心配から慌てて訂正した、という内容の翻訳で、フォークとストーク(コウノトリ)という明意を捨てて、フォークは箸に、軟弱なコウノトリはとんまな動物カモノハシに、と明意は捨てるが論理的構造は保ちながら、ワシへの微妙な心理という暗意が解釈できる仕掛けだという(p.239-241)。モチーフの見事な変換だが、架空世界とはいえ英国的イメージのホビットの世界に、オリエンタルな箸や新大陸起源のカモノハシが闖入するのは、イメージに少々違和感がある。

また、ディケンズの『クリスマス・キャロル』の一節「There's more of gravy than of grave about you, whatever you are!」の訳文として、著者は4つの選択肢を提示し、その4番目「何にしても、あんた、^{うら}恨めしやより、^{うら めしや}裏の飯屋に縁があるぞ!」を、仕掛け翻訳の例としている。graveとgravyを「うらめしや」と「裏の飯屋」へと明意を変えるが、幽霊と食べ物に縁がある2語で、しかも幽霊をバカにするという暗意を、おごそかな「うらめしや」と卑俗な「裏の飯屋」と並べることで、その効果を十分にあげていると著者は考える(p.238)。だが、「うらめしや」という古典的な言い回しは「番町皿屋敷」や円山応挙の描く幽霊のイメージをまとうおり、ヴィクトリア朝の幽霊には馴染まないようにも感じる。ディケンズの翻訳としては、個

人的には2番目の選択肢として提示された「何れにしてもお前さんは墓場よりも肉汁グレーヴの方に縁がありそうだよ。」が読んでいて落ち着くのだが、これは本稿筆者が翻訳テキストによく見られるカタカナ語ルビのような表記を見慣れていることによる、個人的感覚かもしれない。

翻訳テキストのスタイルについては、著者は、前述の『朝日新聞』記事にも言及されていたヴェヌティの翻訳理論を紹介しつつ、「日本の伝統的な「直訳」」について「表層の現象としては異化翻訳に似ていなくもない。しかし、その背景にある動機は外国崇拜ゆえの同化願望であり」「直訳は、いうなれば日本語の異化ではなく、むしろ外国語への同化とでもいうべきもの」(p.21、下線は著者による)であるという¹⁰。本稿筆者はむろん直訳の全てを擁護するわけではないが、ときに原文が透けて見えるような翻訳により、原著者の暗意の理解を助けられる場合もなくはないと思う。そして『ホビット』の箸や『クリスマス・キャロル』の「裏の飯屋」のような、直訳とは反対の巧みな「仕掛け」に出会うと、では原文には何と書かれていたのだろう、という疑問と興味がわいてくる¹¹。

5. 「冒険」への期待

本書に啓発された本稿筆者の興味は、文学テキストからの翻訳という枠組みを外れ、「類似の暗意を生む」という原則を外れ、翻訳による作品の変容や新しく生じる解釈、別メディアの作品となる現象やその変化の様相へと広がる¹²。

最終章「メディア間の翻訳を考える」では、*Jane Eyre*から児童書への書き換えの例がとりあげられている。児童書への書き換えという問題では、古い原典を収集・集成・翻訳した物語集——例えば「アラビアンナイト」やギリシア神話集や「グリム童話」など——の、各話の書き換えのみならず、原典の集成や話の選択も含めて「翻訳」という視点から考察することはできないだろうか。また、著者は翻訳論の対象を「文学テキスト」と規定し(p.iii)、文学テキストを「実用テキストでないもの」「表現を意識して書かれたテキスト」と定義している(p.153)。この定義により「映像テキスト」を「文学テキスト」とみることができれば、映画の「リメイク」「ノベライズ」などについても著者の翻訳論の視点から検討考察することができる¹³。

著者の翻訳についての考察をまとめた第10章には、本稿筆者が深く共感した一節がある。少し長くなるが引用したい。

「この世界には、「翻訳」と呼ばれないものの、同じ種類の精神活動によって成立している事象が満ちあふれている。物語の梗概やリトールド版、小説の映画化、映画から書かれた物語、演劇の舞台等々数え上げればきりが無い。すべて、オリジナル作品の意味を、新たな装いによって変奏しようとする試みである。これが「翻訳」でなくて何であろうか？ 翻訳研究とは「翻訳」という語の用法の研究ではなく、「翻訳」という精神活動の

研究でなければならない。」(p.146、下線は著者による)

本書の書名『翻訳論の冒険』は、英国の哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの著書 *Adventure of Ideas* への憧憬に由来するという (p.ii)。「冒険」のついた書名と本書カバーの楽しい表紙絵は、学術研究書らしからぬ親しみやすい姿をしているが、なべて学問や研究（の、少なくとも一部）は「冒険」であるべきだし、その「冒険」の部分が最もわくわくして楽しいものなのだと思う。著者には翻訳論のさらなる「冒険」を大いに期待したい。

【注】

- 1 ローレンス・ヴェヌティ『翻訳のスキャンダル—差異の倫理に向けて』フィルムアート社、2022年。原著は1998年の出版。
- 2 鴻巣友季子「(文芸時評)「翻訳」を考える ときに透ける、支配の構図」『朝日新聞』2022年6月29日付。
- 3 Roinsard, Régis. (Director). (2019). *Les traducteurs* [Film]. Trésor films. 映画の隠しテーマのひとつが、翻訳家の地位の低さと invisibility であった。本稿で書評する『翻訳論の冒険』（注7文献）には、ヴェヌティの理論を紹介して「……加えて、英米では翻訳者の地位が一般的に低い。……英米の翻訳者は *invisible* な〔目に見えない〕存在である。……／このような状況に宣戦布告を突きつけたヴェヌティの戦略が、異化という翻訳手法である」（p.20）とある。
- 4 佐藤=ロスベアグ・ナナ『学問としての翻訳—『季刊翻訳』『翻訳の世界』とその時代』みすず書房、2020年。
- 5 佐藤=ロスベアグ・ナナ（編著）『翻訳と文学』みすず書房、2021年。
- 6 注4文献、p.174-175, 186.
- 7 山本史郎『翻訳論の冒険』東京大学出版会、2023年。2024年2月には、片岡真伊『日本の小説の翻訳にまつわる特異な問題—文化の架橋者たちがみた「あいだ」』中央公論新社（中公選書）、9月には古川弘子『翻訳をジェンダーする』筑摩書房（ちくまプリマー新書）も出版された。
- 8 「日本と西欧の言語が根底から異質なのに、言語そのものが問題となる翻訳研究において、西欧の考えをそのままあてはめることなどできるはずがないという、たぶん誰もがいだく直感」（p.344）。
- 9 「このような仕掛けを成功させるのは、ラクダが針の穴を通るよりむずかしい」（p.238）。
- 10 著者は第I部第2章に「ヴェヌティの倫理的翻訳理論」という見出しを立て、ヴェヌティのいう異化作用をもたらす翻訳は、アメリカ文化の帝国主義的自己満足や奢りに対する解毒剤の役割を果たす倫理的ジェスチャーなのだという（p.20）。日本語訳の文体と倫理に関連する問題は、異化作用とはまた異なる形で現れる。例えば、ある人種・社会階級・ジェンダーに属する人物の話し言葉にどのような表現を与えるか、という問題がある。熊谷滋子「新訳がひきつぐ東北方言イ

メージ：『風と共に去りぬ』にみる黒人のことば遣いを中心に」（『ことば：研究誌』（36）：2015.12: 18-33）では、黒人奴隷の話し言葉の日本語訳に東北方言やそれに似た表現が充てられてきたことに対し、方言と標準語、地方と中央という視点からみた危惧を表明している。注7で紹介した古川弘子『翻訳をジェンダーする』では、近代小説の中で用いられ、翻訳でも使われるようになった「女ことば」はもともと実在したものではなく、明治時代の標準語制定のうちに、女らしさを表現するための言葉として生まれ、翻訳小説も契機となって普及したことを、先行研究とともに紹介している（同書、特にp.90-111）。前者は人種や社会階級の表象と差別観が東北の言葉に貼りつけられた例、後者は女（らしさ）はこうあるべきという固定観念と差別観から作り出された非実在の言語が、文学テキストによって概念とともに広められた例とみることができよう。

- 11 Jodi Picoultの小説*My Sister's Keeper* (Picoult, J. (2004). *My sister's keeper: a novel* (1st Atria books hardcover ed). Atria.) の翻訳者川副智子氏は、日本語訳タイトルを「わたしのなかのあなた」とした（ジョディ・ピコー『わたしのなかのあなた』（川副智子訳）早川書房、2006年）。原題の明意をずらしながら、多重に込められた暗意の一部を巧みに残している例である。また、Stephen Kingの*Under the Dome* (King, S. (2009). *Under the dome: a novel* (Gallery books trade paperback edition). Gallery Books.) の中に女性を罵る言葉として、rhymed-with-witchという表現が出てくる。つまりwitchと韻を踏む、bで始まる言葉の婉曲表現だろう。これを翻訳者の白石朗氏は「歯痛」と訳している（スティーヴン・キング『アンダー・ザ・ドーム』（上）（下）文藝春秋、2011年）。「はいた」の「は」に濁点を打てば女性への侮辱的罵り言葉と同じ音になるが、「しつう」と読んでしまうと意味不明になるので、初出にはルビが打たれる。また、歯痛と女性とは直接関係がないので、この仕掛けを直ちに理解するのは少々難しい。
- 12 本稿筆者は以前に、フランス語小説が英訳・日本語訳され、色の名前が翻訳・変更され、さらに映画化されるにあたり、色のイメージが変わり、書名と映画題名の暗意が変わったり、映像の意味が変わったり、題名の本来の意味が失われてしまう例を考察した（吉城寺尚子「色名の翻訳と作品の変容：Les rivières pourpresの場合」『城西国際大学大学院紀要』（22）：2019.3:13-32）。
- 13 文字テキスト・文芸テキストの翻訳には「重訳」の問題も含まれると思うが、映像作品についても、例えば原典テキストから・原典の翻訳テキストから・過去のadaptation作品から、対象を重層的に検討考察できると思う。